

< 2017年 2月 >

古賀 順子

聖燭祭とクレープ

キリストの生誕から40日後、2月2日は「聖燭祭」。フランス語では「La Chandeleur」、家内の燭台(chandelle)に火を灯し、クレープを焼いて食する日です。

12月25日キリスト生誕から、東方三博士(バルタザール、メルキオール、ガスパール)がキリスト礼讃に訪れる1月6日「エピファニー(公現祭)」を経て、「聖燭祭」でキリスト生誕の一連の行事が終了します。その「聖燭祭」は、「イエス・キリストの神殿奉獻」の日です。産後40日間の禁忌を終え、出産の汚れを清め、幼子キリストをエルサレム神殿に捧げます。神殿でマリアとヨセフを迎えるのは、112歳の老人シメオンと84歳の寡婦で預言者アンナ。ユダヤの教えに即し、シメオンは幼子キリストを聖なる衣で抱え、アンナは、この子はこの世の救世主だと預言します。神殿に捧げる二羽の白い鳩を手にしたヨセフに付き添われ、マリアがイエス・キリストを神殿に捧げる場面は、特に、ジョット・デイ・ボンドーネ(Giotto di Bondone)(1267-1337)のフレスコ画が知られています。1300年、パドヴァの裕福な貴族エンリコ・スクロヴェーニは、亡き父のため、聖母マリアに捧げる礼拝堂を建立させ、ジョットに内装を依頼します。

天井、左右の壁、出入り口、全ての面が、ジョットのフレスコ画で飾られた「スクロヴェーニ礼拝堂」。天井には、紺青の空に金の星が散りばめられ、聖母マリア、キリスト、預言者、天使たちが見守っています。入り口上部には「最後の審判」。左右の壁は、「聖母マリアの生涯」と「キリストの生涯」が、上中下3段、計34場面に綴られています。マリアの父ヨアキムと母アンナのエピソード、マリアの生誕など、キリスト生誕までが最上段に配され、「イエス・キリストの神殿奉獻」は、右の壁、中段の中央に描かれています。恭しく幼子キリストを抱く老人シメオンに向き合い、幼

子に優しく両手を差し伸べる母マリアの図は、幼児から老人まで、すべての人の世を照らす命の誕生を象徴しています。

では、その「聖燭祭」に、なぜクレープを食べるようになったのか。

いろいろな説明があるようですが、5世紀、アフリカ出身で、史上初の黒人法皇ゲラシウス1世がローマに巡礼に来る信者達にクレープを配ったことに由来するという説。前年に収穫した麦でクレープを作ること、次の年の豊作を祈願するという説。丸い形と黄金の焼き色が、世を照らす太陽を象徴するという説・・・1月6日「公現祭」に食べる「ガレット・デ・ロワ」のような季節感は失われ、今日では、どのパン屋さんでも、クレープは一年中売っています。2月2日が近づくと、自宅用クレープ焼きフライパンの宣伝が目立ち、上手にひっくり返すと縁起が良いなど、季節の行事にまつわる食べ物には間違いありません。

クレープに限らず、今では世俗化してしまった食べ物や慣習など、人が伝えてきた伝統や技術、その精神性の源を見直すと感心させられることも多いのではないのでしょうか。

日本の「節分」と同じく、「聖燭祭」のクレープを食べると春が近くなります。大寒から立春へと季節を分ける行事は、日本もフランスも似ています。季節が始まる時に願い事をしたり、健康管理を促したり、節目の行事を伝えていくことが、人を育てることに繋がっています。

そして、「人に伝えて、人を育てる」のは、宗教に限ったことではないと思います。企業でも、商品・製品を作る技術を伝えるだけではなく、働く職員を育てる、更には使う人を育てる、という精神面が伴わなければ、人も企業も成長しません。人は自分が信じること、信じる人にしかついて行きません。信じることがあれば、それを人にも伝えたいと思い、伝えることが相手を育て、自分も育てられる。その伝え方は人それぞれで、どう伝えていくかを考えることが人生を豊かにしてくれると思います。

